

かいたく

教会のない地域に教会を 刈り入れ場に働き人を



「私は大きな獲物を見つけた者のように、あなたのみことばを喜びます」(詩篇一一九篇一二節)

大きな獲物を見つけるためには、用意周到な計画が必要でしょう。詩篇の作者はそれを、神と神のみことばを見つけることにたとえています。「手ぬかりなくみことばを留意する」と言ったら良いでしょうか。みことばを尋ね求めるために、集中し、瞑想する時間を確保する。それが「手ぬかりなく」です。大きな獲物を見つけることが難しいように、みことばを求めて神のみこころを発見することも簡単なことではないのです。ヨシア王の時代、主の宮で「主の律法の書を見つけた」(Ⅱ歴代誌三四章十四節)という出来事がありました。王が律法のことばを聞いたとき、自分の衣を引き裂いてしまいました。そこに記されている神のみこころと自分たちの霊的現実があまりにもかけ離れていたことを知り、愕然としたのでしょう。王はただちにエルサレムの住民、祭司、レビ人、上の者から下の者まで、すべての民に「主の宮で見つけた契約の書のことばをすべて彼らに読み聞かせ」ました(三四章三十節)。長年宮の奥底に放置していた律法の書の発見は大事件で、王は手ぬかりなくみことばを留意する作業を国全体で行ったのです。今の教会に必要な霊的作業ではないでしょうか。既に教会は、聖書を土台とした主の教えを教えています。しかし、みことばの中に隠されている主の教えの宝物を、自ら探し求める喜びを教えていくことは容易なことではありません。教会はイエス・キリストについて証しされている聖書の全体から、みことばの宝を見つけて出す喜びを味わう訓練が必要です。パズルで例えるなら、多くの人は、主の教えを各ピースごとに知っています。でも、一つのピースだけ眺めても神のお考えはわかりません。パズル全体、つまり神のご計画全体を知るなら、各ピースの意味合いがよりわかります。そのことがみことばの宝を発見する喜びにつながります。これからの聖書の読み方を、手ぬかりなくみことばを留意する読み方に変えてみませんか。「あなたがたがわたしを捜し求めるとき、心を尽くしてわたしを求めるならわたしを見つかる」(エレミヤ二九章十三節)

駅前カフェでのオープンセレモニー



地域に根差した伝道を ～ランチチャペル構想～

港北ニュータウン聖書バプテスト教会
協力牧師 鹿毛 独歩

私たちが伝道する港北ニュータウンは横浜の北部、川崎や東京に隣接する新しい都市構想の中で生まれた町です。横浜聖書バプテスト教会から遣わされ、開拓11年、教会を組織してから30年が過ぎようとしています。人口も当初の5万人から今や21万人の大きな町となりました。

4年に1枚の出会い

伝道の初期の頃は「港北ニュータウン全域にキリストの福音を」との祈りを持って、4年ほどかけてニュータウン全域への教会案内配布を継続してきました。隔週ごとに配布に出かけ、夏期伝道として、夏休みを利用した一週間の配布プログラムも実施してきました。暑い中、夏休みの子どもたち、学生たち、主婦の方々が参加してくださいました。兄弟たちと共に奉仕する伝道の喜びはありましたが、受け取る側から考えてみると、4年間で一枚の案内が玄関ポストに入るに過ぎないことに気づきました、その一枚を見逃したら、一切教会とのつながりはないのも当然でした。

ブロック伝道

そこで、ニュータウンをいくつかのブロックに分けて、1ブロックずつ集中して伝道したらどうだろうかと考えました。配る地域を狭め、一年間に数回の伝道新聞の配布とその

地域での伝道集会の開催を検討しました。兄弟たちの家を解放してもらい、その地域でのお話し会をしたこともありました。しかし、そこでの継続した働きは、なかなか困難がありました。各ブロックにおいても集会する場所の問題が大きなネックとして上がりました。

ランチ伝道

どうしたら、もっと地域に根ざした伝道ができるだろうかとの祈りの中で、ランチチャペル構想が導かれてきました。港北ニュータウンを大きく東西南北、4つの地区に区分し、その一つ一つにランチチャペルとしての集会場を確保していくというものでした。教会から分離した開拓伝道ではなく、教会の地域伝道

の一環として、教会全体の祈りと支援をいただきながら、地域に根ざした伝道をしていくということです。港北ニュータウンは土地の値段も高く、集会場として借りることができない広い場所も余りありません。仲町台のセンターチャペルを中心に分散型の教会形成により、より広く、より深く地域に浸透していくことを願っています。

時に、私の友人が中川駅前でカフェを始めることになり、カフェの横にあるフリースペースをお借りしての集会が出来ることになりました。主は私たちの住まいと共に新たな伝道の地を導いてくださったのです。その地域に住みながら、この地域の方々の救いのために仕えることができる幸いを感じています。

会堂移転の恵みとともに

主は2023年5月、仲町台駅の近くに広い集会場を備えてくださり教会移転の恵みに預かりました。それにともない私たちも転居することになりました。私たちは、主の導きで、仲町台駅から3つ目の駅、中川駅近くに住むことになりました。同



カフェのフリースペース



日曜礼拝の様子

ランチ礼拝スタート
2023年10月から月2回、日曜日午後の集会をしましたが、2025年4月から、私たち夫婦とランチ伝道に重荷を持つ4人の兄弟たちが教会から派遣され、毎週日曜日の朝の礼拝を始めることになりました。そして、ランチに新たに2名の方が導かれ、現在8名で礼拝を捧げています。新しく加えられた一人の方は、25年以上前に家内の子育て支援者としての地域の働きで出会っていた方です。また、もう一人の方の叔母さんは、やはり30年以上前に私が地域で行っていた手話教室で出会っていたことが分かりました。地域で蒔いてきた種、20数年して花開いてきたことに、主にある大きな驚きと感動を覚えています。

一つの教会として

このランチ伝道の働きは、主任牧師が教会全体として牧会を担当し、私がランチ礼拝の説教を担当する形となっています。教会会議で



協力牧師夫妻

もランチの伝道の状況を共有しながら、一つの教会としての共同体意識を確認しています。今後、あと2か所のランチチャペルの開設を祈りながら、港北ニュータウン全域への細かな伝道が展開されることを心より願っています。新しい形の伝道かもしれません。港北ニュータウンという新しい町、急激に発展している町での伝道に様々なチャレンジをしながら、一人一人の救いを求めて前進していきたいと願っています。



鹿毛独歩協力牧師

イエス・キリストの恩寵の中で

ごあいさつ 上田欣子は去る3月21日より体浮腫の治療のため入院。4月1日、90歳卒寿の誕生日を病院内で祝いました。退院の打ち合わせをした数日後、心停止と脳梗塞を発症。5月26日午前10時33分、静かに主の御元に召されました。生前を含め、主にあるご厚誼をいただきましたこと、告別式へのご参列や慰めの電報を賜りましたこと、深く感謝お礼を申し上げます。ありがとうございました。 晃

着任早々の按手礼式、教会組織・独立
人の道は主の御目の前にあり、主はその道筋のすべてに心を向けてくださる。（箴言五章二十一節）

神学校卒業後、奉仕教会であった千葉教会は心温まる歓送会を開いてくださいました。長女のために美しい花柄の綿入れ産着を縫って、贈ってくださいました。愛してくださいだったことを感謝しながら、後ろ髪を引かれる思いで千葉を離れました。1961年4月1日の早朝、名古屋に着任。用意されていたアパートで、旅の荷を解きました。着任週早々に礼拝説教の当務です。出席者は教会員3名、宣教師のご家族、妻と生後間もない長女でした。



神学校卒業間近（後列右から3番目が晃師、前列右から2番目が欣子師）

り、署名された按手証明書を受け取った瞬間、心中にずっしりとした重さがあつたことを覚えております。

按手当日、教会組織が行われ、教会員契約が朗読されました、A・O兄、A・N兄、H・S姉、H・A姉、N・S姉、K・H姉の6名に教会員契約の受諾が求められた上で、上田晃牧師就任の賛意が諮られ、6名全員が賛意を表わされました。社会人2名、ほかは学生で構成された教会でした。この日名古屋バイブルバプテスト教会が名実ともに独立、発足したのです。按手の時期が早かった事由は、京都教会で農村伝道に従事していた経験があつたこと。加えて、同年6月にハッサウエイ宣教師とご家族がお子様の学業の関係で3年近く日本を離れることでした。

出席者のいない主の日

「小さき群れよ、恐れるなかれ。汝らに御国を給うは我が父の御旨なり」

宣教師ご家族が一時帰米された後、礼拝場として用いていた狭いアトリエが広く感じられました。基礎教会員は6名。他にもおられたようですが、教会を離れ、散らばって近隣の教会に行っておられるらしいとの情報を得ました。Y姉、H姉、H兄 H姉、K兄ほか数名です。この方々を連れ戻すことが羊飼いの最初の仕事になりました。独立後しばらくして、出席者を見ない

伝道集会の前の時間は市電唐山停留所前において有志による街頭伝道です。

午後7時半からは伝道集会です。主の日は多忙でした。とりわけ欣子姉は準備とてなしで多忙でしたが、マルタのような愚痴を言ったことは一度もありませんでした。

今でも、兄弟姉妹方一人一人の笑顔がまぶたの裏に焼き付いています。礼拝、祈り、信徒訓練、伝道、食事。霊に燃えた総員献身者教会の兆しが見え始めたのは開拓伝道期でした。人数が増えるに伴って、就任1年目から「早く会堂がほしい」との声が聞こえ始めていました。

三重県桑名市内の開拓伝道の道、

開かれる

「すべての造られた者に福音を宣べ伝えよ」マルコ伝一六章

名古屋バイブルバプテスト教会は、伝道する教会を目指しました。教会の基はキリスト。教会はキリストのからだ。御言葉の学びと訓育（日曜学校を含む）、霊と真による礼拝、祈りと交わり、福音宣教を柱とし、「開拓伝道の時期から開拓伝道を！」を合言葉に名古屋市千種区唐山にある教会と加えて、三重県桑名市内で開拓伝道が始まりました。桑名市内から教会に通い始めた青年がおられたことが発端で、青年は家族や親族、友人、知人に福音を伝えたい願いがあつたのです。



ハッサウエイ宣教師ご家族

主の日があり、長女を抱いた妻を前にして礼拝説教をしたことがありました。私は心の中で教会員をさばいていました。「教会、どうなっている？」「これって、教会？」。疑心暗鬼になり、基礎教会員の兄姉さえ疑いました。「汝らも、我より去らんとするか」。主イエス様の痛みが、我が痛みとなりました。しかし、妻は主の日にはスリッパ12足を並べ、教会員の出席を待っていました。

「二、三人、我が名によって集まるところ我もそのうちに在るなり」

うめき、祈られました。が、ご聖霊は「教会員をさばいていませんか。疑ってはいませんか。愛していますか。理解する努力をしていますか。うわべ

しかしイエスは、彼らにこう言われた。「ほかの町々にも、神の国の福音を伝えなければなりません。わたしはそのために遣わされたのですから。」ルカ四章四十三節

桑名は「焼きはまぐり」で名が知られている街です。労働会館の会議室を借りての伝道が始まりました。何人かの成人男女の出席を得ました。一人の青年が回心され、最初の受浸式が木曽川で行われました。桑名から来ておられる兄弟と2名の姉妹でした。しばらく続いた桑名伝道は、会場側の事情により止む無く終了に至りました。信仰告白をされた方がおられたので、継続できていたら、桑名聖書バプテスト教会が誕生していたのではと大きな落とし物をした気持ちです。しかし、教会は主が建てられるのです。主はほかの場所にご計画をお持ちだったのです。

南区で鳴子団地に伝道始まる

主は時を待たずして、名古屋市南区（現緑区）鳴子団地内に福音を伝える門を開いてくださいました。理由は、前掲の受浸された姉妹家族が鳴子団地に転居されたことです。姉妹方は交通の便がなく、教会に来られなかったのです。ホンダスーパーカブで訪問してはいましたが、お住まいの真ん前に三角型の児童公園があるのに気づきました。西側隅には藤棚があり、紫色の花が垂れ下がっているのです。花好きの

だけを見ていませんか。祈りなさい。

兄姉と主にある交わりを持ちなさい」と私の心を探り、論してくださいまし

た。兄姉方それぞれが、ご家族の福音無理解のなかで、教会に行くことを反対されながらも精一杯、教会生活を送ろうとしておられる様子。昼は働き、夜は学び、疲れた体の状態であるはずなのに、それでも明るく笑顔を見せられる兄弟。往復4時間以上かけて通勤しておられる社会人となられた兄弟。

期末テスト、論文提出に取り組んでいる兄姉。疲れ、苦戦しながらも全身全霊、主と教会に仕えようとしておられる一人一人の姿が目につかび、無意識下で教会員をさばいている自らの無理解さに気づかされたのです。教会員を理解する牧師になろうと悔い改めました。「主よ。愛の足らないこの者に愛心を」「見えるところによらず、信仰を働かせ、何事も善意で人を見る人間に変えてください」。

まず、神の国と神の義を求め、人ではなく自分が自分自身を知ること。神と人との関係における自分をもっと深く掘り下げ、知る必要があることに気づかされました。そうすれば、隣人を多少は理解できる、同情もできるかと思いました。主と自分、牧師と教会員の関係。基本的なことですが、交わりと祈り合いが必要と痛感させられました。

不思議なことでしたが、教会が変わり始め、教会員無欠席。離れていた兄



知多半島で一日ピクニック

私は魅了されて、この藤棚の下で伝道をしたい衝動に駆られました。姉妹に話したところ大喜び。教会に諮って、全員賛成を得たので、主の日の午後2時から姉妹の協力をいただいて、児童伝道と礼拝を始めました。ホンダスーパーカブが大活躍です。雨が降る日は姉妹のご自宅を使わせていただきました。姉妹のお母様も集会に参加され、ご好意を示してくださいました。嬉しく、感謝一杯でした。どれほどの期間続いたか記憶がないほどです。

会堂建設のビジョン

一方、名古屋教会はアトリエ教室の集会所が狭くなっていました。「自分たちの会堂がほしい」が合言葉のようになり、祈りが献げられました。「では、どうすればよい?」。教会の会計事情は、月額2千円の牧師謝儀が満額払えない状態でした。教会員のほとんどが学生で、社会人は2人だけだったのです。声だけでは意味がない。「まずは実行!」とばかり、誰がするともなく会堂建設献金が献げ始められました。誰かが献金額の棒グラフを書いた紙を貼り出しました。少しずつ、棒グラフが伸びていきました。それは兄弟姉妹が献身的に会堂指定献金を献げるようにされたからです。目標は遥かな高峰でした。

ある主の日のことです。女子大生のA姉、S姉が「アルバイトをして、会堂建設のために献げる」と証しされま

した。N高校生が献金かごに体を委ねて「会堂のために、この身を献げる」と真顔で言った時は、一同が大笑いをしました。その頃、晃牧師は某販売会社の社員から入社を勧められました。祈りしました。京都教会時代、農機具を売りながら、修理をしながら、収入を得て、伝道していた経験もあり、「本業は牧師なので、伝道と営業の両立が可能ならば」を条件に、臨時社員として入社しました。二足のわらじを履くことになったのです。ところが不思議なぐらい営業成績が伸び、主の恩恵を感謝しました。入社早々、名古屋支社

全社員の前で新人賞をいただいたのです。副賞に高額の金一封もいただきました。収入が教会経済の一助になりました。大卒初任給の3倍ぐらいの収入があったからです。同僚は「上田君が歩いた跡は草も生えない」と言い、先輩から「どんな営業をしているのか、コツを教えてほしい」と尋ねられることもありました。「誠心誠意お客さんの側に立って商品を説明しています」と答えていました。時には、「教会に来てください。そうすればわかります」と言って、何人かを教会に誘いました。来られた方のなかには、主を告白された方もおられました。Oさん、Mさん、Hさん。懐かしく顔を思い出します。Hさんは家業の畳屋を継がれ、私が名古屋教会の牧師を退くまで、畳の修復や張替えを依頼していました。年月が経っても、出会わせてくださっ



献堂式での特別賛美(欣子師奏楽)



竣工

ていかれ、最後の一枚を張り終わられる時でした。中央で床板同士が山形になったのです。興味深々でした。棟梁がどんどん、と、地下足袋の足で数回踏まれると、床板がビンと張りつめ太鼓の音のような響きがしたのです。名人芸だと思いました。「この人だ!」と直感して、施工願いをしようと話しかけました。教会堂の図面を見ていただきました。予算も話しました。気難しい顔つきで、「考えさせてもらいます」との返事でした。数日後、「大工冥利に尽きます。人生最後の御奉公をさせていただきます」と、快く直営で工事を引き受けてくださったのです。予算は160万円。二級建築士を志していたN兄は「この予算では、このような建物は絶対にできない」と言い張りましたが、私は「主はされる」と一



建設中の川名山会堂

た方々を大切にして、祈りと交わりを継続しているならば、あるいは、その方々に働かれる主の救いの証しを知らされることもあるのです。

教会組織から三年後の会堂建設

積み立てられた献金も合わせ、360万円の借金の道が開かれました。会堂建設する上での立地条件の希望は、便利な交通機関があること。近くに小・中・高・大学などの教育機関があること。檀家制寺院・氏子型の神社が近くにないこと。町が明るいこと。周りに民家があること。将来発展する都市計画があること。実に欲張りな条件です。各所に物件はありましたが、祈り合って、求めて決めた場所が名古屋市昭和区川名山町51番地4の158平米の土地でした。身丈にあった面積で

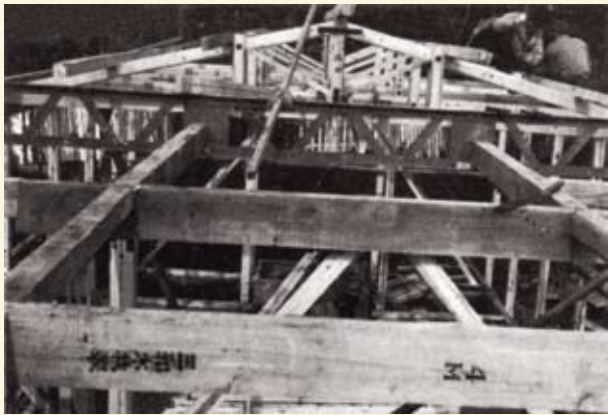
歩も譲らなかつた記憶があります。理由は、礼拝堂内部に中柱がなかったことです。私自身も不安がありました。お互い、しばらくの間、口をききませんでした。基礎の穴掘りは汗を流しながら、兄弟姉妹が力を合わせて手伝いました。壁は芯に竹を縦横に縄で編んだ骨組み工法で、下地となる竹編みも手伝いました。工事が始まると、加工された鉄の梁が何本も運びこまれ、肝をつぶしました。木の柱と鉄の組み合わせ。想像できませんでした。重い鉄の梁が釣り上げられていく工法は圧巻でした。これによって中柱が無い礼拝堂が完成したのです。N兄は、この工法でなければ中柱の無い礼拝堂を建て上げられないことを知っていたので、この予算では絶対にできないと、専門家として案じていたのです。私は、こ

とばで言い尽くせないほどの感動を覚



川名山会堂初期のころ

間口四間。奥行き十二間です。驚いたことは、会堂建設後のある日、市バス停留所の標識「滝川町」が、教会の玄関前の歩道と道路の向かいにも立てられたことです。教会がバス停前になったのです。このバスは、往路は名古屋駅発、栄繁華街経由、教会の玄関前に停車、終点は妙見町です。復路は、繁華街を通って名古屋駅前行きです。黄金路線です。滝川町バス停前、徒歩一秒が教会の玄関になるのです。加えて次のバス停に地下鉄鶴舞線中駅がでさる噂がありました(今は開通しています。余談ですが現教会堂は、一駅都心寄りの川名駅にあります)。さらに幼・小・中・高・大学の全部があるのです。教会の向かいの丘に小学校の建設が始まりました。高校は全国野球の強豪あの中京高校。大学は日本福祉大



木の柱と鉄の梁を組み合わせた骨組み

えました。1963年4月4日が献堂式でした。伊藤鉄太郎棟梁との出会いを通して、1年がかりで会堂が完成したのです。主が出会わせてくださったのです。請求書は予算どおりでした。伊藤鉄太郎氏に感謝の証しとして、腕時計を贈呈しました。N兄は「まいった!主はなされた」と、自分の負けを認めて、泣き顔で喜びして、主を賛美していました。握手。

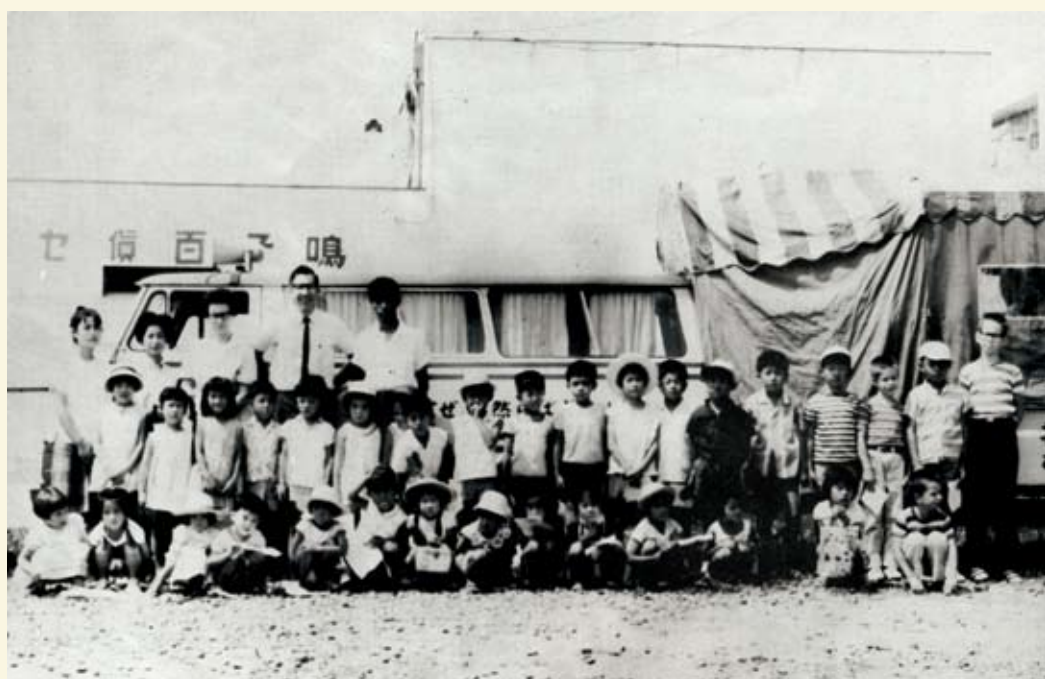
「主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなし。」詩篇一二七篇一節

鳴子団地の伝道進展

その頃、ハッサウエイ師ご家族がアメリカから戻って来られ、三角公園の伝道に協力してくださいるようになりました。私は、京都にいた頃から、パネル自動車による移動伝道教会の夢を持っていました。今日、見られるようになった屋根付きオープンステージの小型自動車です。当時は、そんな車はありませんでした。かねてよりハッサウエイ師にその夢を話しておりました。三角公園の伝道に、そのような車があれば、雨の日も車の中で集会ができると考えたのです。改めて、ハッサウエイ師に提案をしたところ、「車を買いたいと思っていたので、その夢を実現しましょう」と言ってくださり、早速トヨエースを購入し、トレーラーを連結。数本の鉄棒を屋根型に曲げて、トレーラーに溶接し、その上に青色のテ

ント布を張って、車の礼拝所が完成しました。

車体の横には、大きな文字で「名古屋聖書バプテスト移動教会」。早速、鳴子団地の三角公園のそばに駐車。雨の降る日は車の中で、晴れた日は藤棚の下で。毎週日曜の午後、児童伝道と伝道礼拝が献げられました。H兄が応



移動教会(左側のトヨエースと右端のトレーラーをテントで連結)

援に行かれました。二人の姉妹も、長く協力してくださいました。珍しさもあり、子共たちが、さらに集まるようになり、信仰告白の招きに応える児童も徐々が増えてきました。私の二人の娘は常連の生徒で、名古屋から移動教会に乗っていました。今も写真が残っています。ハッサウエイ師が運転される「走る教会」が

話題になり、中日新聞に移動教会車が写真入りで大きく掲載され、驚きました。

天幕集会を鳴子団地の空き地で開催しました。プロパンガス販売業をしておられたM兄弟が「テントは、寒いのでは？」と、ガスストーブを持ってこられた時、主にある愛に感謝しました。神学生が数名、伝道実習のため参加。訪問伝道をされました。活躍しました。移動教会車が劣化、廃車。宣教師御一家は帰米。鳴子団地に借家を契約し、定着伝道に切り替えました。受浸教会員8名が、鳴子団地借家伝

道所に帰属しました。加えて、大勢の日曜学校生徒が集まり、日曜日は賑やかでした。晃牧師は相変わらず、名古屋教会と団地伝道所の礼拝を掛け持ちし、毎週日曜日はスーパークラブで二往復していました。名古屋教会の礼拝は二部に分けられ、一部礼拝は晃牧師、二部礼拝は執事に委ねられました。小さな三角公園の藤棚の下で始まった伝道がからし種の木になっていったのです。教会は「名古屋聖書バプテスト南伝道所」と命名しました。

しばらく経つてのことでした。ビル・ニール宣教師が来名され、説教協力をしてくださるようになりました。ただどしい日本語でしたが、助けていただきました。藤野千郷兄(名古屋教会の最初の献身者)が神学校を卒業。お二人を正式に南伝道所の伝道師として招聘。南伝道所は名古屋教会会員10名の株分けした基礎会員によるスタートでした。兄弟2名、姉妹8名。その後、独立願いが出され、独立を承認。名古屋サウスサイドバイブルバプテスト教会の前身となりました。小さな三角児童公園から始まった伝道が、名古屋サウスサイドバイブルバプテスト教会のからし種になることは、主が定めておられた御計画だったのです。

(次号へ続く)



移動教会でお話する上田牧師



上田牧師ご家族(川名山会堂にて)